



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3795 号 2017.7.26 発行

【相模原殺傷1年】「障害者は人の心失っている」 被告からの手紙、浮かぶ強固な差別意識 産経新聞 2017年7月25日
植松聖被告（桐原正道撮影）

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が刺殺されるなどした事件は、26日で発生から1年を迎えた。これに先立ち、殺人罪などで起訴された元職員の植松聖（さとし）被告（27）が産経新聞の取材に手紙で応じ、「意思の疎通が取れない人は安楽死させるべきだ」などと障害者に対する差別意識を一方的に正当化した。遺族らへの謝罪は一切なかった。



産経新聞は6月下旬、横浜拘置支所（横浜市港南区）に収監されている植松被告へ質問状を送付。今月12日、便箋5枚にわたる約2千字の手書きの手紙が返送されてきた。

植松被告は手紙の冒頭、「私は意思疎通がとれない人間を安楽死させるべきだと考えております」と独自の主張を展開。「世界には“理性と良心”とを授けられていない人間がいます」などとし、「人の心を失っている人間」を「心失者」と呼んでいることを明らかにした。「シンシツシャ」とふりがなが振られており、障害者を指しているとみられる。

やまゆり園に平成24年から約3年間勤務していた植松被告は、入所者について「多種多様な個性」があるとした上で、入所者の行動を「奇声をあげて走りまわる者、いきなり暴れ壊す者」などと表現。「最低限度の自立ができない人間を支援することは自然の法則に反する行為です」と持論を述べ、勤務経験から「彼らが不幸の元である確信をもつことができました」と差別的思想を持つに至った経緯も記した。

一方、被告が事件前に肯定していたとされるナチスの優生思想については、「短絡的な思考に偏る」と非難した。自説と異なることを示唆したが、それ以上の詳細な説明はなかった。

手紙の終盤には「意思疎通がとれない人間を安楽死させます」「多くの人間が幸せに生きる為」などと身勝手な論を展開した。

質問状では、拘置所での生活や事件への後悔の有無などを尋ねたが、こうした内容には触れず、遺族・被害者への思いや謝罪、反省の記述もなかった。



【用語解説】相模原殺傷事件

平成28年7月26日午前2時ごろ、相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」を元職員の植松聖被告が襲撃。入所者19人が刃物で刺され死亡、職員2人を含む26人が負傷した。植松被告は同年9月から約5カ月間の鑑定留置で「自己愛性パーソナリティー障害」などと診断され、横浜地検が完全責任能力を認定。今年2月に殺人罪などで起訴された。事件前の昨年2月、障害者の殺害を示唆する言動を繰り返して措置入院となっていたが、同市や病院が翌3月の退院後の住所を把握していなかったことも発覚した。

相模原殺傷1年 消えぬ障害者への偏見 「優生思想」とどう向き合う？

産経新聞 2017年7月25日
多くの入所者らが殺害され、負傷する事件があった知的障害者施設「津久井やまゆり園」＝2016年7月26日、相模原市緑区
「あなたたちの子供は社会の役に全く立っていません。権利を主張する前に、たくさんの税金を使ってしまっていることを謝ってください」



知的障害の子供を持つ親の団体などからなる「全国手をつなぐ育成会連合会」には事件後、300件を超す手紙やメール、電話が寄せられた。連合会の久保厚子会長によると、冒頭の手紙の文言のように、寄せられた声の1割くらいが植松聖被告の“優生思想”に共感する内容だったという。

植松被告が精神疾患で措置入院していたことから、偏見は精神障害を持つ人たちへも向けられた。精神疾患を持つ当事者の団体「全国『精神病』者集団」の桐原尚之氏は「事件後、近所から犯罪者に思われると親が自分を医療保護入院にしてしまった、などの相談が寄せられた」と明かす。

こうした偏見とどう向き合えばよいのか。久保会長は「表に出さなくても、多くの人は障害者は自分たちと違うという認識がある」と推察し、障害は良くないもの、という意識が自分の中にあることを自覚することが大事だと指摘する。

精神科医療に詳しい長谷川利夫杏林大教授は「障害者はいなくなればよいと思うことと実際に行動することの間には壁がある。思うことを許さない社会もまた生きづらいのではないか」と話す。桐原氏は「障害者は死んだ方がいいという言説は、健常者側が付き合うことを諦めたときに発するものだ。どんな感情をもっても自由だが、付き合うことをやめないことが必要だ」と訴えている。

障害者殺傷事件 被告は直前まで知人に賛同求める NHK ニュース 2017年7月26日

相模原市の知的障害者施設で46人が殺傷された事件から26日で1年となります。殺人などの罪で起訴された施設の前職員、植松聖被告は事件を起こす直前まで障害者を殺害する計画を知人に打ち明け賛同を求め続けていたことが捜査関係者への取材でわかりました。

この事件は去年7月26日の未明、相模原市緑区の知的障害者の入所施設「津久井やまゆり園」で、入所していた障害のある人たちが次々に刃物で刺されて19人が殺害され27人が重軽傷を負ったもので、元職員の植松聖被告（27）が殺人などの罪で起訴されています。

これまでの調べに対し植松被告は「障害者は不幸を作ることしかできない」などと供述し、その考えは今も一貫して変わっていないことがわかっていますが、事件前日から直前までの詳しい行動が捜査関係者への取材で明らかになりました。

それによりますと、植松被告は事件前日に自宅から凶器となった包丁を持ち出したあと、都内と自宅を2回往復しながら都内のホームセンターで職員を拘束するための結束バンドを購入したということです。

そして、障害者を殺害する計画について、事件直前まで東京・新宿区の飲食店などで知人ら2人に打ち明け、賛同を求め続けていたことが捜査関係者への取材でわかりました。

調べに対し植松被告は「事件の前日、計画を実行に移すことを決めた。周囲から邪魔されると思い、早く計画を実行しなければと思った」と供述しているということです。植松被告は、事件直前まで賛同を求め続けていたほか、事件から1年たった今もNHKが被告本人とやり取りした手紙の中で、みずからのゆがんだ考えに固執し続けている様子が

うかがえました。

被告の友人「事件直前に知人の女性に計画話す」

植松被告と事件の2日ほど前まで一緒に遊んでいたという友人は、そのときの様子について「一緒にボーリングをしたり川に遊びに行ったりしました。以前、『障害者を殺害する』とか『計画をどう思うか』などと聞いてきたことがありましたが、この時は全くそのようなことは言わず、ふだんどおりの様子でした」と話していました。

また、事件を起こす直前の7月25日の夜のことについて「植松被告と一緒に食事をした知人の女性から『植松被告が障害者殺害計画について話していて怖かった』という電話がありました。それを聞いて、植松被告はまだ同じような考えを持っていたんだなと思いました」と話していました。

そのうえで「事件の計画について植松被告が話してくるたびに周りにいた友達で止めていましたが、それでも事件を起こしてしまったことが残念でならないし、裏切られたような気持ちです」と話していました。

施設をどう再建するか 協議進む

殺傷事件が起きた相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」は現在、閉鎖され、どのような形で再建を進めるのか協議が進められています。

当時、施設には入所者およそ150人が暮らしていましたが、事件後、被害がなかった施設内の別の部屋などに移動し、およそ60人が施設に残って生活していました。そして、ことし4月、横浜市港南区にある別の施設に引っ越ししました。

今月6日には、事件後、初めて施設内が報道陣に公開され、衣服をしまっていたタンスや飾りつけが今も残されていて、犠牲になった人たちの暮らしの名残をかいま見ることができました。

施設の再建をめぐるのは、今月18日、どのように再建するか検討する県の部会で元の場所で施設を建て替えるのに加えて、入所者が一時的に移転している横浜市でも施設を整備し、分散するという案がまとめられています。

部会では、来月上旬までにこの案を報告書としてまとめ、最終的に県が再建策を決定することにしています。そのうえで県は平成32年度中の再建を目指すとしています。

障害者殺傷事件から1年 胸の内を明かす遺族

NHK ニュース 2017年7月26日

相模原市の知的障害者施設で46人が殺傷された事件から26日で1年となります。差別や偏見への不安が消えない中、犠牲者の遺族が胸の内を明かしました。

植松被告の考え否定したいと手記

犠牲となった55歳の男性の家族が事件を起こした植松被告の考えを否定したいと手記を寄せました。

そこには「加害者は私の家族を生きている価値がない人間だといったがそれは違います。とても明るくて周囲を笑わせたり泣かせたり大切なことを教えたりできる人間でした。こういう人が生きている価値がないなんていえるのでしょうか。私たち遺族に殺されてよかったなんて思う人は誰一人いません」と綴られています。

男性は喜怒哀楽が豊かで、言葉で表現するのは苦手でも声のトーンを使い分けて気持ちを伝えてくれたといいます。また、一度覚えたことは忘れず、家族の誕生日が来ればカレンダーを指さして「きょうだね」というように教えてくれたということです。体はとても健康で施設から届く健康診断の結果はよかったため、母親は「きっと親より長生きできるね」と喜んでいたといいます。

数年前までに亡くなった両親が近所の寺に男性の葬儀の代金を払っていたことを事件の後知ったということで、「まさかこんな事件で両親を追いかけるように亡くなるなんて思っていなかったと思います」と話していました。家族は毎日、男性の仏壇に線香をあげ好きだったものを供えて、思い出話をして過ごしているということです。

植松被告が語った「障害者は生きる意味がない」という言葉に事件後、インターネット上で同調する人たちがいたことに家族は強いショックを受け、憤りを抱えてきました。そのうえで「事件直後は大きな騒ぎになりましたが、すぐに消えてしまい、いまは何もなかったように感じて怖いです。思い出したくはないけれど忘れて欲しくもありません」と話していました。

娘の遺影に声をかける毎日

事件で犠牲となった26歳の女性の母親が懸命に生きてきた娘のことを伝えたいと初めてカメラの前で語りました。

26歳の娘を失った母親は「今も娘がそばにいるような気がして、出かけるときは娘の遺影にいつてくるねと言い帰ってきたらただいま、きょうはこんなことがあったよなどと声をかける毎日です」と話しました。

3歳で自閉症と診断された娘は、言葉で伝えることは苦手でしたが、態度で気持ちを伝えてくれたといいます。母親は娘の成長をつぶさに写真に記録してきたということで、事件のあと幼いころからの娘の写真を見ながら、26年間を振り返っています。

母親は「親ばかかもしれませんが二重あごになっている写真もかわいいです。好きな写真を並べて成長をたどっていると涙が出てきます。娘が大好きだったのです」と語りました。

娘が高校生のころ夫の病気や親の介護が重なり母親は体調を崩して長期入院したため、世話が出なくなり施設で暮らすようになりました。頻繁に会いにいけない中で、施設から届く便りに記された娘の様子をメモに書き留めて大切にしてきました。

そこには納涼祭でじんべいを着せてもらったことや山梨に行つてぶどうをおいしそうに食べ、笑顔が多く見られたことなどが記されています。また、事件のあと娘が人気バンド、スピッツの「チェリー」という曲を気に入っていたことを知つたため、その曲を繰り返し聴いているということです。

母親は、「今は少し落ち着いているのですが、少し前は本当に私もそっちにいきたくて思っていました。でもあまり、泣いてばかりいると娘が『お母さん、頑張つて』と言うような気がして、一生懸命生きています」と語りました。

自分の心境を綴つた手記には「娘の事を思い出さない日はありません。よくそばによりそつて甘えてきたね。そんなあなたとともに一緒に歩んで来ました。

今、思うと、もっといっぱい遊んであげればよかった。もっと思いをわかつてあげたかった。心残りがいっぱいあります」と記しています。

そして最後に、「きらきらした瞳で多くの人に安らぎをあたえてくれいろんな人に力をくれ愛されていたのに何でこんなことになってしまったのか、あまりにもひどすぎる。障害を持っているのはとても大変だけれど、望んで障害者になつたわけではない。偏見を持たないでほしい。障害者がいやでもいらぬ命はないのです。けつして傷づけたり殺してはならない。絶対に」と綴っています。

「意思疎通ができないというのは違う」

事件で犠牲となった35歳の女性の父親と兄が初めてカメラの前で胸のうちのを語りました。父親は娘の写真を見せながら、「娘を思い出さない日はありませんでした」と話しました。

去年7月、相模原市の知的障害者施設、津久井やまゆり園で入所者19人が殺害され、27人が重軽傷を負つた事件では、元職員の植松聖被告(27)が「障害者是不幸をつくることしかできない」、「意思疎通がとれない障害者は生きていてもしかたがない」などと供述しました。

これまで19人の遺族は、事件の衝撃や差別へのおそれなどからカメラの前で語ることはありませんでした。しかし、事件から1年を前にした今月中旬、犠牲となった35歳の女性の父親が写真を見せながら初めてカメラの前で胸のうちのを語りました。

父親は「この1年、娘のことを思い出さない日はありませんでした。娘が亡くなつたの

は施設に預けた自分のせいです。毎日、遺影にごめんねと語りかけてきました。自宅で一緒に風呂に入ったことやだっこをせがまれたことをふと思い出し、おえつします。だっこをすると妻のほうを向いて『お父さんは私のほうが好きなんだよ』という得意気な表情をしていました。めちゃめちゃかわいかったです。事件の3週間ほど前にやまゆり園で最後に娘と会った際、だっこしてあげられなかったことが今も心残りです」と話しました。

殺人などの罪で起訴された植松聖被告については、「裁判を見たいとは思いません。被告の言葉を聞いても娘は戻ってきません。やったことの実で裁判所に判断してもらえればと思います」と話しました。

また、女性の兄も取材に応じ、「妹は『長くは生きられない』と言われ続けてきました。一緒に遊んでいたときに発作を起こして救急車で運ばれたこともあり常に気がかりでした。それでも危ない時期を何度も乗り越えて30歳を越え、人生をまっとうすると信じていました。それが最後、ああいう形になりありえないです」と無念の思いを語りました。

そして、植松被告が語った「意思疎通ができない障害者を狙った」という言葉について「妹は自己主張が強く、意思疎通ができないというのは違います。『コーヒーが飲みたい』と甘えてきて、あげれば『まずい』と言ったり『まあいいんじゃないか』といった表情をしていました。遊んでほしいとか、嫌なことは嫌だとか、意思をしっかりと表しました。被告は何を言っているのかさっぱりわかりません」と述べました。

相模原殺傷事件1年 笑顔の娘、今もまぶたに
母親が描いた長女の似顔絵。アイスを前にうれしそうな表情
を浮かべる様子を思い出しながら描いた。大きくてかわいい
目が魅力だった＝2017年7月14日、木下翔太郎撮影

相模原市の障害者施設殺傷事件で26歳だった長女を失った母親は毎日欠かさず、笑顔を向ける長女の遺影に手を合わせる。「とても大事な存在。もっと一緒にいたかった」。1年たっても、悲しみは癒えない。【木下翔太郎】

母、悲しみ癒えず

長女は母を「ママ」と呼び、幼いころはトイレまでついてきた。3歳で自閉症とわかった。言葉での意思疎通は苦手だが、手をつなぎ、寄りかかるように甘えた。自動販売機の前で立ち止まってボタンを押し、「これが飲みたい」とねだるような顔で見てきた。「娘がいてくれるだけで幸せだった」

ふとした瞬間に思い出がよぎる。

毎日新聞 2017年7月26日



障害者の日常を地域に開く、やまゆり園事件から1年

畑山敦子、佐藤啓介

朝日新聞 2017年7月26日



リビングでくつろぐ利用者と職員。右から古田和彦さん、関口幸一さん、木内弘さん、世話人の伊藤梅子さん＝千葉県袖



ケ浦市のグループホーム「たんぼぼの家」

千葉県袖ケ浦市の住宅街にある障害者のグループホーム「たんぼぼの家」には、50代から70代までの男性6人が、世話人の支援を受けて共同で暮らす。

7月のある夕方、木内弘さん（73）がデイサービスから戻ってきた。勤め先から帰ってきた古田和彦さん（51）と一緒に、リビングでくつろぎながらテレビを見た。

「俺にとって、ここは最高。みんなけんかしないし、ずっといたい」と木内さん。外出するのも自由だ。

被害者匿名化「差別を助長」 障害者団体、県警対応に今も疑問

産経新聞 2017年7月25日

事件では、神奈川県警が「知的障害者の支援施設」であることなどを理由に、被害者の実名公表を拒否したが、障害者団体からは今も疑問の声が上がる。

「県警の対応は一見家族を気遣っているようで、差別を助長していた。公表するのが本当だと家族を説得するくらいの対応が必要だった」。知的障害者の子供を持つ親の会「全国知的障害者施設家族会連合会」の由岐透理事長はこう振り返り、「親自身が公表が当たり前と主張できるような社会にならないと、第二の植松被告が出てしまう」と危機感をあらわにする。

立教大の服部孝章名誉教授（メディア法）も「社会として被害者に哀悼の意を示すとき、Aさん、Bさんという記号で本当に良いのか」と疑問を呈する。

平成17年の個人情報保護法の全面施行以降に強まった匿名化の流れ。遺族の意向がある中での匿名公表は「家族の声は丁寧に拾っていくべきで、仕方のない面もある」とする一方、「遺族の意向とするのみで基準もなく、警察の恣（し）意（い）的な運用がなされている現状は問題。警察の持つ記録に、正当な理由があればアクセスできるシステムをつくらべきだ」と警鐘を鳴らした。

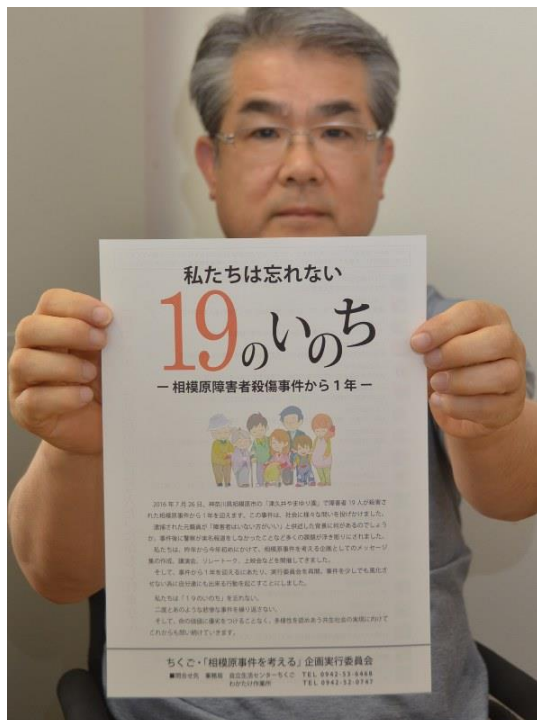
事件から1年 「忘れない 19のいのち」 あす筑後市でビラ配布 /福岡

毎日新聞 2017年7月25日

相模原殺傷事件から1年の26日に配布するビラを掲げる東代表

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で19人の命が奪われるなどした事件から1年を迎える26日、風化を防ごうと筑後市でビラ配り活動がある。関係者は「背景に社会の影響がなかったのか深く考えずにふたをしたら事件はまた起こる」と危機感を抱き、ビラ配りへの参加も呼び掛けている。【上田泰嗣】

福祉施設などでつくる「ちくご『相模原事件を考える』企画実行委員会」が実施する。



事件の教訓、再発防止につながらず 議論、精神医療のみに終始

産経新聞 2017年7月25日

相模原市の障害者施設殺傷事件で19人が犠牲になった教訓が、再発防止につながっていない。精神医療分野の改革に終始し、刑事司法上の課題を議論した形跡がない。精神保健福祉

法の改正案は秋の臨時国会で成立が見込まれているが、「監視の強化」と主張する野党や障害者支援団体などからの抵抗が激しい。措置入院制度を変えたとしても、「犯罪防止の効果はない」（障害者団体）との声も根強い。

政府の事件への反応は早かった。事件2日後の関係閣僚会議で、安倍晋三首相が「再発防止」を指示。それを受け約2週間後、有識者による事件の検証・再発防止策検討チームの初会合が開かれた。ただ、メンバーは精神医療の専門家を中心。狭い範囲の議論にならざるをえなかった。

会合には毎回、厚生労働省のほか、警察庁、法務省も参加したが、関係者は「警察捜査の検証が抜け落ちていた」と語る。検討チームが昨年末、4カ月かけてまとめた再発防止策の提言で、喫緊の課題として改革を凝縮させたのが、精神保健福祉法の改正だ。

植松聖被告（27）は事件前、障害者殺害を示唆する言動を繰り返したため措置入院し、退院後は支援がなく孤立を深め、凶行に及んだとされる。「大麻使用による精神障害」と診断されたが、精神医療の現場では薬物診療の知見が不十分だった。警察や自治体、病院との連携もなく、事件防止という意味で措置入院制度は機能しなかった。

法改正案では、自治体側に退院後の支援計画の作成を義務付け、作成のための地域協議会に警察も参加することを規定した。関係機関の情報共有と連携強化が、事件を防ぐ基盤となると考えたからだ。

ところが、日本精神神経学会など医療関係者と障害者の支援団体が、事件防止を目的とした法改正に「治安維持の道具に使うべきではない」と強い懸念を続々と表明。このため、厚労省は法案の審議中に急遽（きゅうきょ）、再発防止に関する文言を資料から削除する異例の措置を取り、謝罪にまで追い込まれた。法案は参院で可決されたものの、衆院では継続審議となっており、秋の臨時国会で再び、野党側の抵抗が予想される。

検討チーム座長で成城大の山本輝之教授は「法改正は措置入院患者の医療を継続し、患者が地域に孤立しないよう安心して暮らせるようにするものだ」と法案の早期成立を訴えている。

「相模原殺傷事件」を障害者女性が取材 ネット放送局で番組を配信



東京新聞 2017年7月26日
花束を手に取材で津久井やまゆり園を訪れた永井広美さん（パンジーメディアの番組から）

26日に発生から1年を迎えた相模原障害者殺傷事件。知的障害があり、いじめや虐待を受けた経験がある女性が、事件が起きた障害者施設「津久井やまゆり園」の関係者ら取材した番組の配信が、インターネット放送局で始まった。障害のある人にとって「幸せな暮らしとは何か」を問いかけている。（諏訪慧）

取材したのは、大阪府東大阪市のグループホームで暮らす永井広美さん（44）。入居するグループホームを運営する同市の社会福祉法人「創思苑」が運営主体で障害者が制作に携わるインターネット放送局「パンジーメディア」で、「パンジーの眼 相模原事件から1年」のコーナー名で二十一日から配信されている。

番組は、永井さんが相模原市へ向かうシーンからスタート。同園では門前で手を合わせて献花し、自身のつらい経験を明かす。「ここに立つと、そのときのことが思い出され、自分が被害に遭ったような気持ちになる」と吐露する。

永井さんは以前、別の番組に出演。小さいころに母親を亡くし、二歳のときに兄と一緒に児童養護施設で暮らし始めたことなどを語っている。小学四年のころ、父親の元に戻り、

再婚相手の女性らも一緒に生活するようになった。

女性には永井さんの妹となる女の子がいた。父親は、妹と永井さんを比べた。勉強などで「どうしてできないんだ」と怒られ蹴られるなどしたという。学校もつらかった。クラスの男子全員から「おまえ、きもいねん」といじめられた。「学校に行きたくなかったけれど、お父さんに怒られたくないので、仕方なく通った」と振り返っている。

その後、施設と自宅を行ったり来たり。二十六歳から十年間暮らした知的障害者の施設では、職員にたたかれたり、髪を引っ張られたりした。三十六歳のときに創思苑が運営するグループホームに転居。今は映画やアイドルグループのコンサートに行くなどし「やっとな私の人生が見つかった」と楽しんでいる。

やまゆり園建て替えの議論では、入所者の地域移行も議論されている。今回の番組では、やまゆり園の入所者で直接の被害は免れた二十代の男性の母親と、障害者の生活の場について意見を交わした。男性には重度の行動障害があり、他に受け入れてくれる施設がなかったというが、母親は「こういうところに閉じ込めておくのが幸せなのかなと、ずっと考えていた」と悩みを明かす。永井さんは、自身の今の生活を基に「施設ではなく、地域で暮らした方が伸び伸びと生活できるんじゃないかなって思います」と話した。

入所者の今後の暮らしについて考える集会や、受け入れを表明している地元の社会福祉法人の幹部へのインタビューも盛り込んだ。障害者が暮らす場が家庭であれ、施設であれ、必ずしも幸せになれるわけではないことを体験している永井さんのレポートを通じて、入居者や家族の幸せ、地域移行の課題などを考えさせる内容となっている。

番組制作を振り返って、永井さんは「やまゆり園の入所者がいまどのような暮らしをしているのか気になる。これからも追っていきたい」と話した。

視聴はネットで「パンジーメディア」と検索。毎月、新番組が制作されるが八月以降も視聴できる。

やまゆり園事件から1年で追悼式

毎日小学生新聞 2017年7月26日

かながわけんさがみはらし しょうがいしゃしせつ つく い えん さくねん がつ にち にゆうしよしゃ にん
神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で、昨年7月26日に入所者19人
が刺し殺される事件が起きました。亡くなった19人の追悼式が24日、同市内で開かれ、
いぞく にん しゅつせき
遺族など700人が出席しました。

さいだん な ひと しゃしん いえい か にゆうしよしゃ お がみ つく やまゆり
祭壇に亡くなった人の写真(遺影)はなく、代わりに入所者が折り紙で作ったヤマユリが
かざ しょうがいしゃ かぞく い ふんいき よ なか いぞく なか なまえ
飾られました。障害者や家族が生きづらい雰囲気が世の中にあり、遺族の中には名前を
こうひょう ひと しゅつせき くるいわゆうじかながわけんちじ しきてんご ほんらい
公表したくない人がいるからです。出席した黒岩祐治神奈川県知事は、式典後に「本来は
19人の名前を申し上げ、一人一人の遺影が飾られるべきだが、今の日本では許される
じょうきよう ざんねん おも はな
状況ではない。残念に思う」と話しました。

じけん さつじん つみ もとえんしよくいん おとこ たいほ さいばん てつづ すず
事件では殺人などの罪で元園職員の男が逮捕され、裁判の手続きが進んでいます。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行